

特集

浜林生之助

英語教育界に輝く 「北の一星」



戦前、道内の旧制中学に学ばれた方では、「浜林生之助」^{いくのすけ}著の英語教科書を使った方も多いのではないのでしょうか。今回は、戦前の英語教育界に多大な貢献をなし、高商語学教授陣の屋台骨を文字通り背負い続けた生之助を特集に取り上げ、彼についての研究を進めておられる名城大学の東先生と、ご子息の浜林正夫先生に特別寄稿をお願いいたしました。

「語学の小樽高商」の看板教授であった浜林生之助

^{ひがし ひろみち}
東 博通（名城大学教授）

小樽高商は「小樽外国語学校」あるいは「北の外国語学校」と呼ばれるほど外国語教育が充実していた。伊藤整は「私のような生徒は、この学校で語学だけ学んだようなものである。」と書いている。その伊藤の忘れられない恩師の一人に浜林生之助がいた。浜林は伊藤が入学する2年前の大正9年（1920年）3月に小樽高商に着任し、昭和22年（1947

年）に亡くなるまで、約28年に亘って高商（経専）の教壇に立ち、「語学の小樽高商」の看板を担った人物である。

彼は明治20年（1887年）に三重県多気郡東黒部村乙部（現松阪市乙部町）に生まれた。5歳のときに父親が他界し、母親と姉の三人家族で少年時代を送る。小説家になりたかったらしく、高等小学校を卒業すると東京に出て、肥料店に勤めたり印刷工をしながら夢を追ったこともあった。やがて郷里に戻り、16歳で三重県師範学校に入学する。彼は国語や作文が得意であった。三重師範を卒業して広島高等師範学校に進学した時も、当初は国語漢文部を志望した。しかし、毎週行われる白文訓点に恐れをなして、第二志望の英語部に転向する。広島高師では英語が重視され、とりわけ、英語部の生徒には徹底した語学の訓練が施された。浜林の卓越した英語力は、この高師時代にその基礎が培われたと言ってよい。

広島高師を卒業すると、鹿児島県立川内中学校に奉職する。教員生活4年目を迎えた頃から、浜林は盛んに『英語研究』に寄稿する。当時の『英語研究』は中等学校上級学年用の雑誌で、その中で彼は英文学作品の訳注を行った。大正5年（1916年）4月に『英語研究』は創刊百号記念号を出す。そこには、岡倉由三郎、坪内雄蔵（逍遥）、平田喜一（秃木）などの著名な英学者の記事に混じって浜林の訳注が掲載されている。その冒頭には坊主頭にチョビひげを生やした彼の顔写真が載っている。川内中学に7年間勤務したあと、福島県立福島中学校に移り、そして、翌年、小樽高商に転出する。浜林が小樽高商に迎えられた経緯は、伊藤整の『若い詩人の肖像』に描かれている。当時の学校長渡

YMCAのメンバーとともに（大正15年頃、浜林の左が小林象三、円内右が南亮三郎、左は中村和之雄）



四寮 玉の井寮の前で寮生たちと（大正12年頃）